

天 界

第 百 十 號 (第十卷) 昭和五年四月五月

『超海王星』時代

— 言 頭 卷 —

超海王星が発見された。時代は茲に一新時機を劃して、今や吾々は超海王星時代に入ったのである。

超海王星の発見を待つ吾々は實に永く待ちくたびれかけてゐた。そして、最近にはキリアム・ピケリング氏等の新研究が發表されたにかゝはらず、もはや『此の星は発見されないのか!?!』とさへ思はれた。況んや、今から十五年前に出版されたロリエルの論文などは、學界の大部分から忘れられて了つたかの感があつたと言つて好い。しかるに、去る三月十三日(かの天王星の発見によつて永久に紀念される三月十三日)に、米國よりの飛電は、全世界の學俗一般を驚かせた。そして、人々をして今更の如く、故ロリエルと其の學業、フラグスタフ天文臺の後繼者たちと彼等の忍耐と努力とに讚嘆の聲を放たしめずには置かなかつた。

超海王星の発見は、其れ自体、既に驚天動地の大事件であるが、同時に又、吾人は此の事件と關連して、八十幾年前のかの海王星の発見當時をしのび、更に其の以前にまでも遡つて、天王星の発見事情にも思ひを馳せることを強ひられる。尤も、古

代人たちが夢想だにしなかつた「大遊星の発見」の此の三つのうち、天王星の場合は、それが徹頭徹尾偶然の成功であつたが故に、多少趣きを異にするものであるが、之れに反し、海王星とわが超海王星との場合は、純粹な數理學の指導によつて「望遠鏡後」の人々が導かれた成功であるが故に、共に、特別な意味に於いて吾人を喜ばしめる。殊に、二つとも、専ら天王星の攝動を論據としたのであるが、海王星の場合に研究材料としたのは角度百三十秒にも垂んとする天王星攝動であつたのに對し、こんどの超海王星は、僅々二三秒の天王星攝動によつて、発見されたのであつて、其の鮮やかなる成功は、さすがに、第十九世紀に對する第二十世紀の優越さを誇らしく感ぜしめるに足る。

天王星発見の1781年と、海王星発見の1846年とが共に學界の新時機を劃した如く、今1930年は、超海王星の名と共に、人類の歴史を飾る一新時機として記念されるであらう。今までの時代を「超海王星以前の時代」と呼び、今後を、誇らしくも「超海王星の時代」と唱へて、吾れ人共に、ひろがり行く太陽系の萬歳を、聲高く叫びたい心地もする。

超海王星の発見によつて、學界に今や多くの問題は提出された。先づ、この新遊星の軌道は果して如何ほどまでロリエルの豫言と合致するものであるか？ 次に、其の實體の形狀は？ 直徑は？ 質量は？ 更に、其の衛星の存否は如何？ 其の光度の微弱なるは何故か？ アルベードは？ 雲圍氣は？ 又、此の新星によつて検討を繰り返すべく餘儀なくされるかのボーデの法則は？ 又、ラプラス乃至ジョンス氏等の太陽系進化論は如何に改造さるべきか？——此等の諸問題は時代の新味を以つて吾人の頭上に迫りつゝあるを覺える。